

先月までの為替相場のレビューと、
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2017/10/03

引き締め方向に動くか

通貨ペア	基調		ページ数
ユーロ/円	➡	円安が支えか 予想レンジ: 129.000~135.000円	2-3
ユーロ/ドル	↘	調整が先行しやすい? 予想レンジ: 1.13300~1.20500ドル	4-5
ポンド/円	➡	利上げ期待感と離脱不透明感 予想レンジ: 146.500-153.500円	6-7
ポンド/ドル	➡	インフレ動向と離脱交渉がカギ 予想レンジ: 1.29500~1.36000ドル	8-9

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2017 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

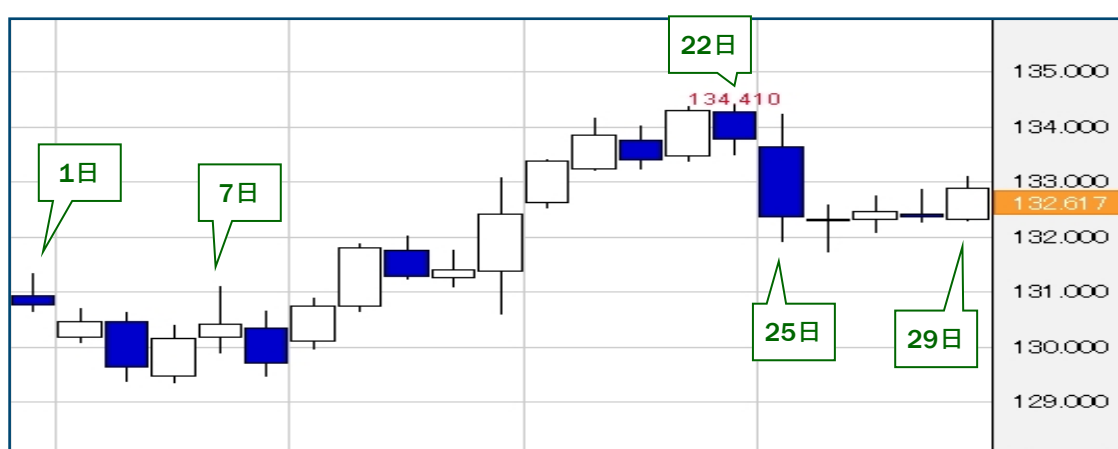
ユーロ/円 9月の推移

EUR/JPY

9月のユーロ/円相場は129.366～134.410円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.5%の上昇(ユーロ高・円安)となった。

一部で欧州中銀(ECB)による量的緩和縮小計画の発表が先送りされるとの見方が浮上する中、ユーロ/円は弱含みの動きが先行。しかし、ECBは10月理事会での発表を示唆した事から反発した。日欧の金融政策の温度差が意識されて円売りが優勢となったほか、NYダウ平均が上値を伸ばした事も追い風となり、22日に2015年12月以来の高値となる134.40円台まで一段高となった。

ただ、その後は独総選挙後に同国政治を巡る懸念が強まった事もあり、26日に131.70円台まで上げ幅を縮小した。なお、米朝間の緊張の高まりを受けて下押し場面も一時的に見られたが影響は小さかった。



四本値

OPEN	130.938
HIGH	134.410
LOW	129.366
CLOSE	132.902

1日	ECB関係者の話として「ECBは12月まで量的緩和縮小計画を準備できない可能性がある」との見解が示されるとユーロ売りが活発化した。
7日	ECB理事会後、ドラギ総裁は「ユーロ相場が不確実性のもとになっている」と発言するも、政策変更について「おそらく10月に決定する」などと発言した。これを受けてユーロ買いが強まり、ユーロ/円は一時131円台を回復。なおECBスタッフ予想は、経済成長率見通しを2017年が2.2%と6月時点(1.9%)から引き上げた(18年は1.8%、19年は1.7%で6月時点と変わらず)一方、インフレ率見通しは2018年が1.3%、19年は1.5%と6月時点(1.4%、1.6%)から引き下げた(17年は1.5%で変わらず)。しかし、ECBがインフレ見通しを引き下げた事を背景に独仏の長期金利が低下した事などから、129.90円台まで反落する場面も見られた。
22日	李北朝鮮外相が「太平洋上で過去最大級の水爆実験」の可能性に言及するなど、北朝鮮情勢の緊張の高まりを嫌気して日経平均が下落する中でユーロ/円は下落。ただ、独9月製造業PMI・速報は60.6と、市場予想(59.0)を上回り、前回(59.3)から上昇した他、ユーロ圏9月製造業PMI・速報も結果は良好だった事から一時的に切り返す場面も見られた。
25日	前日24日に行われた独総選挙で、メルケル首相率いる与党・キリスト教民主・社会同盟(CDU・CSU)が第1党の座を維持し、首相の4選が確実となるも、得票率は32.9%と前回2013年(41.5%)から低下した事で、政権基盤の弱体化が懸念された。これを受けてユーロが軟調に推移。李北朝鮮外相が「北朝鮮は米国の戦略爆撃機の撃墜を含め、あらゆる対抗手段を講ずる権利を有する」などの発言が伝わると、米国株が下げ幅を拡大し、ユーロ/円は急落した。なお、ドラギECB総裁は「依然としてインフレ見通しにいくぶん不確実性がみられる」「極めて大規模な金融緩和が必要」「為替レートの変動は不透明性の源」などと述べて、金融政策の正常化にやや慎重な姿勢を示した。
29日	ユーロ圏9月消費者物価指数・速報は前年比+1.5%となり、市場予想(+1.6%)に届かず、前回から横ばいであった。

EUR/JPY

日 経 平 均

OPEN	19733.57
HIGH	20481.27
LOW	19239.52
CLOSE	20356.28

独 D A X

OPEN	12101.15
HIGH	12828.86
LOW	12050.53
CLOSE	12828.86

独 2 年 債 利 回 り

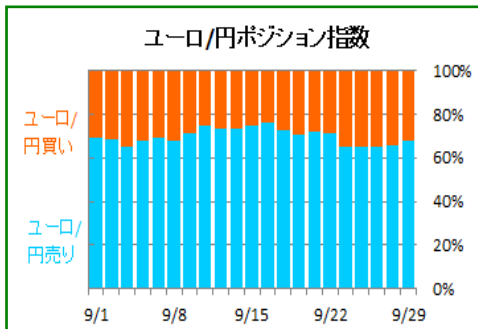
OPEN	-0.727%
HIGH	-0.665%
LOW	-0.768%
CLOSE	-0.692%

独 10 年 債 利 回 り

OPEN	0.376%
HIGH	0.518%
LOW	0.292%
CLOSE	0.464%

9月のポジション動向

10月のユーロ圏の注目イベント



- ・8月ユーロ圏小売売上高(4日)
- ・8月ユーロ圏鉱工業生産(12日)
- ・10月独ZEW景気期待指数(17日)
- ・10月独/ユーロ圏製造業PMI・速報(24日)
- ・10月独Ifo景況感指数(25日)
- ・10月独消費者物価指数・速報値(30日)
- ・10月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(31日)
- ・ECB議事録(5日)
- ・EU経済・財務相理事会(10日)
- ・8月ユーロ圏財政相理事会(10日)
- ・10月独IfO景況感指数(25日)
- ・ECB理事会(26日)
- ・7-9月期ユーロ圏GDP・速報値(31日)

10月の見通し

[月間指標カレンダー\(外部リンク\)](#)

9月のユーロはドルに対して小幅下落した一方、円に対しては上昇した。世界的な株高などを受けた円売りによるところが大きいと見る。また、強いユーロ売り要因が見当たらない事から、対ドルでのユーロ安は欧州中銀(ECB)の緩和縮小観測を背景とした年初からの上昇に対する調整と考えられる。

こうした中、10月22日に本邦で衆議院選挙が行われる。今回は自民・公明の両党で過半数の議席を獲得できるかが焦点である。現時点では過半数を割り込む公算は小さいが、希望の党の躍進などにより万一過半数を割るとの見方が浮上するようならば、「政権交代でアベノミクス終了」との観測が海外勢を中心とした円買い戻しを誘う事もあり得る。選挙まで半月以上もある事から、関連報道に神経質になる可能性がある。その他、ドイツ政局(連立交渉の行方)や26日のECB理事会(金融緩和縮小の具体策が明らかとなるか)、北朝鮮関連報道にも注目したい。

テクニカル面では、今年春に週足の一目均衡表の雲を上抜けて以降は転換線を下値支持として堅調に推移している。足下で134円台での上値の重さが見られる事から調整が先行しやすいと見るが、週足の一目均衡表の転換線(執筆時:130.988円)付近で下げ止まるようならば、上昇基調が続いている公算が大きい。その場合は先月高値(134.410円)更新を試す展開もあるだろう。(川畑)

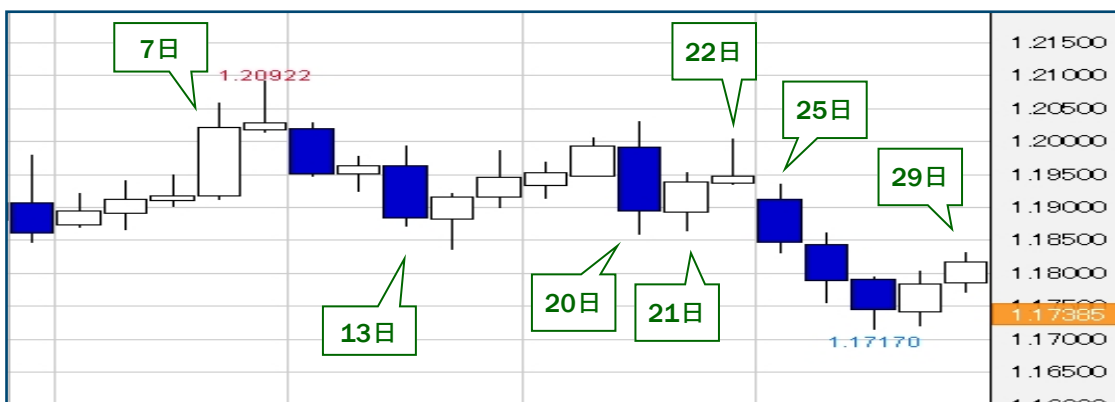
(予想レンジ:129.000~135.000円)

ユーロ/ドル 9月の推移

EUR/USD

9月のユーロ/ドル相場は1.17170～1.20922ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.8%の小幅下落(ユーロ安・ドル高)となった。

欧州中銀(ECB)が10月理事会での緩和縮小の具体策発表を示唆した事からユーロ買いが強まると、8日に2015年1月以来の高値となる1.21ドル目前まで上昇した。その後は1.20ドルを挟んで足踏みが続いたが、20日の米連邦公開市場委員会(FOMC)で年内利上げ期待が浮上してドル買いが優勢となると反落。独総選挙後に同国政治を巡る懸念が強まった事も重しとなり、27日に1.1710ドル台まで反落した。



四本値

OPEN	1.19080
HIGH	1.20922
LOW	1.17170
CLOSE	1.18174

7日	ECB理事会後にドラギ総裁が「ユーロ相場が不確実性のもとになっている」と発言するも、政策変更について「おそらく10月に決定する」などと発言した。これを受けてユーロ買いが強まった。なおECBスタッフ予想は、経済成長率見通しを2017年が2.2%と6月時点(1.9%)から引き上げた(18年は1.8%、19年は1.7%で6月時点と変わらず)一方、インフレ率見通しは2018年が1.3%、19年は1.5%と6月時点(1.4%、1.6%)から引き下げた(17年は1.5%で変わらず)。
13日	米8月生産者物価指数が前月の下落から上昇に転じ、ドル買いが活発化。トランプ米大統領が「過去最大の減税承認プロセスが近く始まる」と述べたのに続き、米共和党のライアン下院議長が「9月25日の週に税制改革の草案を公表する」と発言。これを受けて米国債利回りが上昇した事も合わさり、ユーロ/ドルが一時1.1870ドル台まで下落した。
20日	米FOMCで、最も注目された金利見通しについて、16人のメンバーのうち11人が年内の追加利上げを見込んでいる事が明らかとなった。イエレン米連邦準備制度理事会(FRB)議長が景気に楽観的な見方を示した事などからドル買いが強まり、ユーロ/ドルは急落した。
21日	スペインのカタルーニャ州のプチデモン首相が「スペインからの独立を問う住民投票を予定通り10月1日に行う」と発言。
22日	独9月製造業PMI・速報は60.6と、市場予想(59.0)を上回り、前回(59.3)から上昇した他、ユーロ圏9月製造業PMI・速報も結果は良好だった。
25日	前日24日に行われた独総選挙で、メルケル首相率いる与党・キリスト教民主・社会同盟(CDU・CSU)が第1党の座を維持し、首相の4選が確実となるも、得票率は32.9%と前回2013年(41.5%)から低下した事で、政権基盤の弱体化が懸念された。これを受けてユーロが軟調に推移した。
29日	ユーロ圏9月消費者物価指数・速報は前年比+1.5%となり、市場予想(+1.6%)に届かず、前回から横ばいであった。

EUR/USD

NYダウ平均

OPEN	21981.77
HIGH	22419.51
LOW	21709.63
CLOSE	22405.09

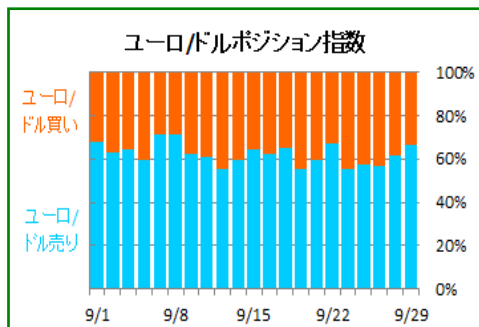
独10年債利回り

OPEN	0.376%
HIGH	0.518%
LOW	0.292%
CLOSE	0.464%

米10年債利回り

OPEN	2.1257%
HIGH	2.3568%
LOW	2.0144%
CLOSE	2.3336%

9月のポジション動向



10月のユーロ圏の注目イベント

- ・8月ユーロ圏小売売上高(4日)
- ・8月ユーロ圏鉱工業生産(12日)
- ・10月独ZEW景気期待指数(17日)
- ・10月独/ユーロ圏製造業PMI・速報(24日)
- ・10月独Ifo景況感指数(25日)
- ・10月独消費者物価指数・速報値(30日)
- ・10月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(31日)
- ・ECB議事録(5日)
- ・EU経済・財務相理事会(10日)
- ・7-9月期ユーロ圏GDP・速報値(31日)
- ・ECB理事会(26日)

10月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

ユーロ/ドル相場は、5月以降は日足の一目均衡表の雲を割り込む事無く堅調に推移してきたが、10月は雲の中でスタートしており、年初からの上昇に陰りが見える。今月は雲下限を維持できるかが焦点である。その雲下限は、執筆時点では1.16ドル前後で推移しているが、月末にかけて1.1760ドル台までせり上がってくる。4月中旬に続いて雲下限付近で踏み留まるようならば、調整終了で反発に向かう公算である。週足で三役好転が点灯しているとはいえ、割ってしまうようならば調整が深くなる事も考えられる。その場合は週足の一目均衡表の基準線(同、1.13310ドル)に向けた一段安もあるだろう。

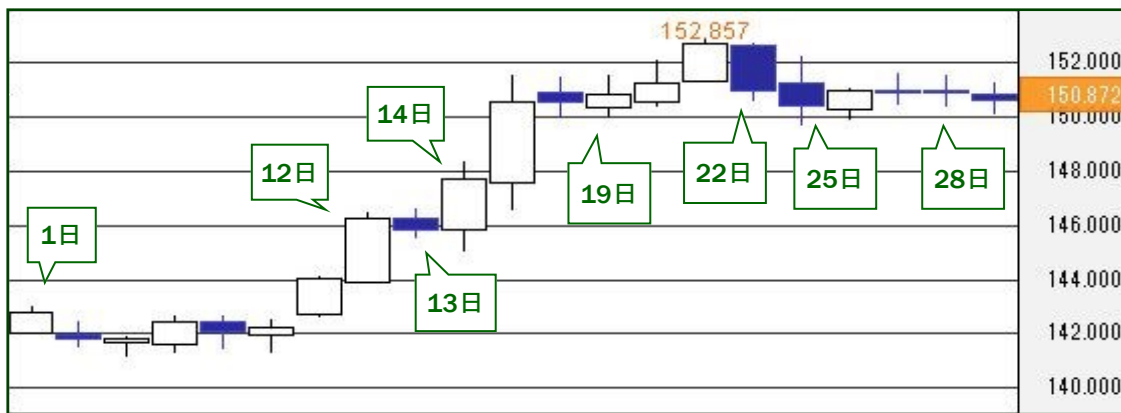
また、26日のECB理事会では、金融緩和縮小の具体策が明らかとなるかが焦点である。先月の一部報道で具体策公表が年末までずれ込むと報じられており、ECB内での調整に時間が掛かるようならば、失望からユーロ売りが強まる事も考えられる。期待が高い分、直後は荒れた展開が見込まれる。(川畑)

(予想レンジ: 1.13300~1.20500ドル)

GBP/JPY

ポンド/円 9月の推移

9月のポンド/円相場は141.188～152.857円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約6.0%の上昇(ポンド高・円安)となった。最大の上昇要因は、14日の英中銀(BOE)金融政策委員会(MPC)で、年内の利上げ観測が急速に高まった事だろう。大規模緩和を維持する構えの日銀との政策スタンスの違いがポンド高・円安に繋がった面もある。北朝鮮情勢の不安定化(円高要因)や、英国と欧州連合(EU)の離脱交渉の難航観測(ポンド安要因)などが上値を抑える場面もあったが、影響は限定的だった。なお、21日に付けた152.857円の高値は、英国国民投票でEU離脱が決まった2016年6月24日以来のものだ。



四本値	
OPEN	142.089
HIGH	152.857
LOW	141.188
CLOSE	150.684

1日	英8月製造業PMIIは56.9と、市場予想(55.0)および前回(55.3)を上回り、2017年4月以来の水準に上昇。その後、米8月雇用統計が冴えない結果となった事もあって、ポンド高・ドル安が進行した。
12日	英8月消費者物価指数は前年比+2.9%と、市場予想(+2.8%)を上回り、前回(+2.6%)から伸びが加速。また、英8月生産者物価指数も前年比+3.4%、英8月小売物価指数も前年比+3.9%となり、いずれも予想(+3.1%、+3.7%)を上回った。これらを受けてBOEの利上げ観測が高まりポンド買いが活発化した。
13日	英8月雇用統計は失業者数が0.28万人減少したほか、失業率は2.3%であった。同時に発表された5-7月の週平均賃金が、前年比+2.1%と予想(+2.3%)を下回り、伸びが前回から横ばいに留まった事を受けてポンド売りが強まった。
14日	BOEはMPCを開き、政策金利(0.25%)の据え置きを発表。同時に発表した議事録で、据え置きが7対2の決定であった事が明らかになると、(利上げ支持票が増えなかったため)一時ポンド売りが強まった。しかし、大半のメンバーが「経済が引き続き成長し、インフレ圧力が上昇し続ければ、今後数カ月以内に利上げを実施する必要がある」との見解で一致した事が判明すると一転してポンド買いが強まった。その後、カーニーBOE総裁が「自分も向こう数カ月で金融緩和縮小を見込んだ1人」と発言した事を受けてポンドは一段高となった。
19日	トランプ米大統領が国連総会で、北朝鮮を「完全に破壊」せざるを得なくなる可能性もあると警告。「ロケットマン(金正恩朝鮮労働党委員長を揶揄)は自身および自身の体制に対する自爆任務に就いている」などと発言。これを受けてリスク回避の円買いに傾く場面があったが、米国株が堅調に推移する中で円買いは持続しなかった。
22日	メイ英首相が欧州連合(EU)離脱に関する演説を行い「英国は単一市場と関税同盟から離脱する」事を改めて表明するとポンド売りが強まった。市場の一部に、メイ首相が英経済への悪影響に考慮して離脱方針を(ソフト・ブレイグジットへ)修正するとの期待があった模様。その後、格付け会社ムーディーズは、英格付けを「Aa1」から「Aa2」に引き下げたと発表(見通しは「安定的」)。これを受けてポンドの下げが加速した。
25日	李北朝鮮外相が、トランプ米大統領の(19日の)発言は北朝鮮に宣戦布告を行ったものであり、北朝鮮は米国の戦略爆撃機の撃墜を含め、あらゆる対抗手段を講ずる権利を有するとの考えを示した事が伝わると、米国株が下げ幅を拡大し円買いが活発化した。
28日	英国のデービス欧州連合(EU)離脱担当相が、Brexitを巡り今週行われた第4回交渉会合について、「かなり進展した」と述べた事を受けてポンドが買われた。一方、EUのバルニエ首席交渉官は「建設的な1週間だったが、十分な進展を遂げるという意味ではまだ足りない。今後数週間、数カ月間にさらなる取り組みが必要だ」との見解を示した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

GBP/JPY

日経平均

OPEN	19733.57
HIGH	20481.27
LOW	19239.52
CLOSE	20356.28

FTSE100

OPEN	7430.62
HIGH	7460.52
LOW	7196.58
CLOSE	7372.76

英2年債利回り

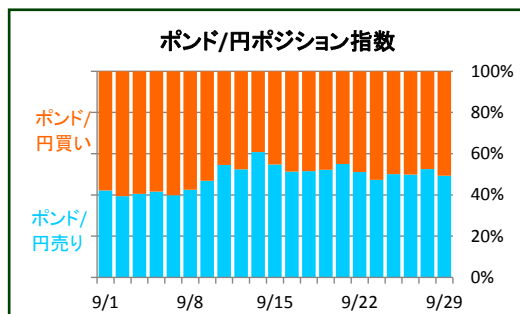
OPEN	0.171%
HIGH	0.505%
LOW	0.136%
CLOSE	0.467%

英10年債利回り

OPEN	1.036%
HIGH	1.428%
LOW	0.951%
CLOSE	1.365%

9月のポジション動向

10月の英国の注目材料



- ・9月英製造業PMI(2日)
- ・9月英建設業PMI(3日)
- ・9月英サービス業PMI(4日)
- ・英・EU離脱交渉(9日～)
- ・8月英貿易収支(10日)
- ・8月英鉱工業生産(10日)
- ・9月英消費者物価指数(17日)
- ・9月英小売物価指数(17日)
- ・9月英生産者物価指数(17日)
- ・9月英雇用統計(18日)
- ・9月英小売売上高(19日)
- ・EU首脳会議(19-20日)
- ・7-9月期英GDP・速報値(25日)

10月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

想定以上のインフレ上昇によって英中銀(BOE)が11月に利上げに動く可能性が高まっている。一方で日銀は、想定したほどインフレが上昇しない中、大規模緩和を維持する姿勢を強調している。こうした中銀のスタンスの違いからは、ポンド高・円安が進みやすい地合いと言えるだろう。次回のBOE理事会に向けて、英景気が堅調を維持しているか、英インフレの上昇基調に変化はないか、主要経済指標で確認したい。

一方、英国の欧州連合(EU)離脱を巡る交渉は引き続きポンドの重しとなりそうだ。9月28日まで行われた第4回交渉では、「精算金」などの条件面の合意にメドがつけられなかった。実質的な交渉期間は来年の秋までとされており、残された約1年で離脱後の貿易面についての交渉までを纏め上げられるか不透明と言わざるを得ない。9日から始まる第5回目の交渉にも過大な期待はかけづらい。

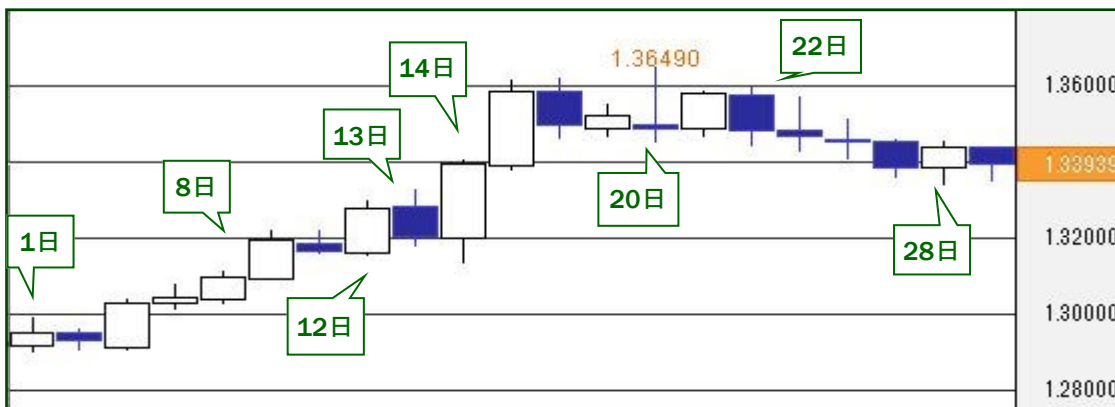
10月のポンド/円相場はBOEの11月利上げ期待感と、EU離脱を巡る不透明感のどちらがより強まるかがポイントになりそうだ。(神田)

(予想レンジ: 146.500~153.500円)

ポンド/ドル 9月の推移

GBP/USD

9月のポンド/ドル相場は、1.29051～1.36490ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約3.6%の上昇(ポンド高・ドル安)となった。12日に発表された英8月消費者物価指数などのインフレ指標が軒並み上昇した事などから、英中銀(BOE)は14日の金融政策委員会(MPC)で「今後数ヶ月で利上げ」のシグナルを発信。これを受けて20日には1.36490ドルまで、ポンド高が進んだが、下旬にかけては伸び悩んだ。米連邦公開市場委員会(FOMC)で年内の追加利上げの可能性が増した事や、トランプ米大統領の税制改革案(減税案)が具体的に示された事などから、ドルが買い戻されたためだ。



四本値

OPEN	1.29181
HIGH	1.36490
LOW	1.29051
CLOSE	1.33986

1日	英8月製造業PMIは56.9と、市場予想(55.0)および前回(55.3)を上回り、2017年4月以来の水準に上昇した。
8日	英7月鉱工業生産は前月比+0.2%と予想通りの結果であった。また、英7月貿易収支は115.76億ポンドの赤字となり、赤字額は予想(120.00億ポンド)を下回った。
12日	英8月消費者物価指数は前年比+2.9%と、市場予想(+2.8%)を上回り、前回(+2.6%)から伸びが加速。また、英8月生産者物価指数も前年比+3.4%、英8月小売物価指数も前年比+3.9%となり、いずれも予想(+3.1%、+3.7%)を上回った。これらを受けてBOEの利上げ観測が高まりポンド買いが活発化した。
13日	英8月雇用統計は失業者数が0.28万人減少したほか、失業率は2.3%であった。同時に発表された5-7月の週平均賃金が、前年比+2.1%と予想(+2.3%)を下回り、伸びが前回から横ばいに留まった事を受けてポンド売りが強まった。
14日	英中銀(BOE)は政策金利(0.25%)の据え置きを発表。同時に発表した議事録で、据え置きが7対2の決定であった事が明らかになると、(利上げ支持票が増えなかったため)一時ポンド売りが強まった。しかし、大半のメンバーが「経済が引き続き成長し、インフレ圧力が上昇し続ければ、今後数カ月以内に利上げを実施する必要がある」との見解で一致した事が判明すると一転してポンド買いが強まった。その後、カーニーBOE総裁が「自分も向こう数カ月で金融緩和縮小を見込んだ1人」と発言した事を受けてポンドが一段高となった。
20日	米FOMCで12月利上げの見通しが示された事や、イエレン米連邦準備制度理事会(FRB)議長が、低インフレは一時的な現象との見解を示した事を受けてドルが買われると、ポンド/ドルは下落した。
22日	メイ英首相が欧州連合(EU)離脱に関する演説を行い「英国は単一市場と関税同盟から離脱する」事を改めて表明するとポンド売りが強まった。市場の一部に、メイ首相が英経済への悪影響に考慮して離脱方針を(ソフト・ブレイグジットへ)修正するとの期待があった模様。その後、格付け会社ムーディーズは、英格付けを「Aa1」から「Aa2」に引き下げたと発表(見通しは「安定的」)。これを受けてポンドの下げが加速した。
28日	英国のデービス欧州連合(EU)離脱担当相が、Brexitを巡り今週行われた第4回交渉会合について、「かなり進展した」と述べた事を受けてポンドが買われた。一方、EUのバルニエ首席交渉官は「建設的な1週間だったが、十分な進展を遂げるという意味ではまだ足りない。今後数週間、数カ月間にさらなる取り組みが必要だ」との見解を示した。

GBP/USD

NYダウ平均

OPEN	21981.77
HIGH	22419.51
LOW	21709.63
CLOSE	22405.09

米10年債利回り

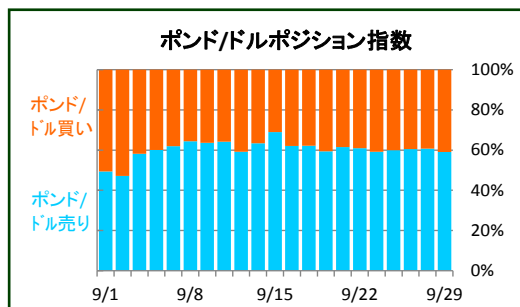
OPEN	2.1257%
HIGH	2.3568%
LOW	2.0144%
CLOSE	2.3336%

英10年債利回り

OPEN	1.036%
HIGH	1.428%
LOW	0.951%
CLOSE	1.365%

9月のポジション動向

10月の英国の注目材料



- ・9月英製造業PMI(2日)
- ・9月英建設業PMI(3日)
- ・9月英サービス業PMI(4日)
- ・英・EU離脱交渉(9日～)
- ・8月英貿易収支(10日)
- ・8月英鉱工業生産(10日)
- ・9月英消費者物価指数(17日)
- ・9月英小売物価指数(17日)
- ・9月英生産者物価指数(17日)
- ・9月英雇用統計(18日)
- ・9月英小売売上高(19日)
- ・EU首脳会議(19-20日)
- ・7-9月期英GDP・速報値(25日)

10月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

欧州連合(EU)からの離脱決定後も英経済が底堅さを維持する中、インフレが上昇基調を辿っており、これに対応するために英中銀(BOE)が早期の利上げを余儀なくされる可能性が高まっている。英OIS(オーバーナイト・インデックス・スワップ)市場が織り込む11月の利上げ確率が8割超(10月2日時点)となっており、BOEが来月のMPCでインフレレポートの発表と合わせて利上げに踏み切るとの見方が強まっている。10月は、英主要経済指標の結果から、利上げの是非を判断する展開となりそうだ。中でも17日の英9月消費者物価指数、英9月小売物価指数、英9月生産者物価指数は大きな注目を集めよう。

その他、9日からは、英国とEUとの離脱交渉の第5回目の会合が行われる。当初は19-20日のEU首脳会議で、「精算金」などの離脱条件に関する承認を取り付けて、通商協議に移る算段もあったが、EUのバルニエ主席交渉官は「十分な進展を得るにはまだ数ヶ月かかる」との見解を示しており、第5回会合も条件面の交渉で難航が見込まれる。

利上げ観測はポンドにポジティブだが、EUとの離脱交渉の難航はポンドにネガティブな反応をもたらす公算が大きい。10月のポンド/ドル相場は強弱要因の綱引きで神経質な展開が予想される。(神田)

(予想レンジ: 1.29500~1.36000ドル)